

6 華岡青洲の乳癌患者33名の術後生存期間を基にした 手術成績の表し方の検討

金谷 貢¹⁾, 金谷 桂子²⁾

¹⁾新潟大学大学院医歯学総合研究科, ²⁾周明館 新潟

【はじめに】華岡青洲は経口全身麻酔薬「麻沸散(湯)」(青洲の歿後に「通仙散」とも云われた)を開発し、文化元年10月13日に全身麻酔下での手術を世界で初めて行ったことで知られている。これは乳癌の手術であったが、これ以降、『松木明知：改訂版 華岡青洲と麻沸散』(以下、松木著書)によれば、『乳巖姓名録』(『呉秀三：華岡青洲先生及其外科』に復刻)を基にすると青洲は140名余りの乳癌患者の手術を行ったと推定される。それらの患者名は期日(年月日)、住所とともにこの姓名録に記されている。

ところで、松木はこの『乳巖姓名録』に記されている患者の歿年月日を鋭意調査した。その結果、33名の歿年月日については術後生存期間が明らかになった。松木著書には、「33名の平均術後生存期間は47カ月であった。」とある。

この「33名の……47カ月であった。」という記述は青洲の乳癌手術の成績を端的に表している。このように、ある数値群の代表値として平均値を算出することはよくある。ただし、平均値を用いるのは、たとえば正規分布のように左右対称にデータが分布していて、中央付近に平均値がある場合に適当である。よって、青洲の乳癌手術成績を代表値で表す場合、33名の術後生存期間の分布を調べてから適当な代表値を選択する必要があるが、そのような検討を行った報告は見あたらない。

そこで本論考では、これら33名の術後生存期間を基にその分布および適当な代表値について調べた。さらに1～10年実測生存率も調べ、華岡青洲の乳癌手術成績の的確な表し方を検討した。

なお、『乳巖姓名録』について、松木著書によれば、すべての患者が手術を受けたかどうかは定かではなく、期日が初診日なのか手術日なのかも正確には分からないが、本稿では同書にならって、33名の患者は手術を受けており、また、それらの期日は手術日と見做して論考した。33名の期日と歿年月日は『松木明知：華岡青洲の新研究』から引用し、現代の値と比較できるように西暦換算による術後生存期間を算出して用いた。

【33名の術後生存期間の分布】33名の術後生存期間は、1年未満9名、1年以上2年未満(以下、「1-2年」と表記)11名、2-3年2名、3-4年4名、4-5年1名、5年以上6名であった。5年以上の6名の術後生存期間を月数で表すと、それぞれ83, 85, 105, 140, 147および490カ月であった。これらをヒストグラムにしたところ、1年以上2年未満にピークがあって、術後生存期間が長い方に向かって裾野が広い(右に尾を引く)分布になっていた。

【33名の術後生存期間の代表値】上述のように、術後生存期間の分布は平均値を中心として、左右対称な形ではないことが明らかになった。したがって、代表値としては平均値(47カ月23日)よりも中央値(18カ月27日)が適当である。

【1～10年実測生存率】癌治療の成績として1, 2, 3, 5および10年生存率が、中でも5年生存率がよく用いられると思われる。観察開始日を手術日とした場合、上記の術後生存期間が各当該年数以上となる患者が該当する。5年実測生存率の場合、術後生存期間が5年以上の患者は6名なので、6/33より18.2%となる。同様に1, 2, 3および10年実測生存率はそれぞれ72.7, 39.4, 33.3および9.1%となる。観察開始日は診断日に設定することも多い。その場合、診断日が『乳巖姓名録』期日の17～18日以上前ならば、1および5年実測生存率はそれぞれ75.8と21.2%になる。また、相対生存率は必要なデータが揃っていないので算出できなかった。以上、5年実測生存率が20%程度であることは、「彼女らの多くは乳癌が相当進行した時点で手術を受けたと推察される……」(松木著書)ことを考慮すると、著しく優秀な乳癌手術成績と言ってよいと思われる。